

巻頭言

## 独創，調和，若さの日本肥満学会 —誕生から隆盛への軌跡—

みどり健康管理センター

徳永 勝人

1980年に日本肥満学会が誕生してから30年になる。私の書棚には、第1回日本肥満研究会記録から全号、順番に並べられている。設立当初から、独創，調和，発信力を旗印に、美容目的など商業主義を排除し、アカデミックな学会を目指してきた。

日本肥満学会は、東日本の東京慈恵会医科大学阿部正和教授と西日本の大阪大学垂井清一郎教授が中心となって設立された。当時、国際的に評価されていた九州の大村裕初代肥満学会理事長や四国の島津孝先生らにも参加してもらい、基礎と臨床のバランス，地域的偏在がないよう試みた。東日本と西日本でほぼ交互に開催され、これまで15回ずつの開催となっている。

「肥満研究」は日本肥満学会雑誌として1995年、第1号が発刊された。私は最初の4年間、編集委員をやっていた。数年前、尼崎市でメタボリックシンドロームの講演会を行った後、開業医の先生から「肥満研究は肥満Q&Aなど面白く、読む所がいっぱいあっていいですね。いつも読んでいます」と言ってもらった。

発刊当時、封も開けられず、ごみ箱行きとなっていた学会雑誌も多かった。いかに興味深く読んでもらえるか、齋藤康委員長らと智恵を絞り、原著のほか、巻頭言，総説，トピックス，連絡事項などを盛り込んだ。編集委員は脂の乗り切った40歳代の人とし、まとめ役として編集長を置くこととした。医学雑誌の中には、編集委員に定年をもうけず高齢化しているものもあり、4年間の期限が設けられた。

肥満学は1960年代にできた若い学問で、自由・闊達，独創的な試みが行われ、日本肥満学会から発信されたものも多い。内臓脂肪型肥満，内臓脂肪症候群，アディポサイトカイン，アディポネクチンなどは国内のみならず，海外にまで発信されている。標準体重(kg) = 身長(m)<sup>2</sup> × 22，肥満と肥満症を明確に区別する診断基準も日本独自のものである。

肥満学は、いろいろな側面を持つ。臨床的には内分泌学から分かれ、国際学会としては国際生理学会の1分科会として出発している。米国のNIH肥満症ガイドラインは循環器部門が作成し、オーストラリアでは糖尿病学者が肥満研究の中心となっている。現在の日本肥満学会は循環器(動脈硬化，高血圧)と糖尿病の研究者が原動力となって肥満研究が進展し、ピュアな肥満研究者が両輪をつなぐ車軸の役目をしている。大阪大学第2内科(松澤佑次肥満学会理事長)に所属し、ブレイ門下生(井上修二前理事長，齊藤昌之「肥満研究」編集長など)でもある私は、盟友である宮崎滋先生や大野誠先生らとともに日本肥満学会の発展を支え、何度かの危機を乗り越えてきた。

意識して心配りをしておかないと、東京一極集中，基礎研究の減少など偏ったものになり、学会の発展は望めなくなる。臨床研究も糖尿病，脂質異常症，高血圧症，循環器，消化器，呼吸器，整形外科，産婦人科，小児科，外科，精神科など多くの分野の研究者が集まることによって，新しいアイデアが生まれ，幅広い考え方で肥満症患者を診察できることになる。

肥満学会の歩みをみると，1980年から脂肪分布異常の研究が始まり，1990年に神戸で国際

肥満学会を開催，1995年半ばはアディポネクチンの発見など分子生物学の進歩で注目され，2005年にメタボリックシンドローム診断基準が作成され，ピークを迎えた。

研究は英語で発表し，世界に発信するという目標があった。世界研究機関ランキング(1999～2009年)の肥満研究分野で大阪大学の論文の引用回数は，1論文当たり63.76回で世界一となっている。他の大学の肥満研究も世界的に優れたものが多くなり，肥満研究者の増加とともに底辺が広がっている。肥満研究の成果を社会的ムーブメントにするという目標は，2008年から厚生労働省によって開始された特定健診・保健指導で国民に広く知れ渡ることとなった。

日本肥満学会も発展・成長期から隆盛期を迎え，円熟期に入ろうとしている。今後も独創，調和，発信力を保ち，夢のある研究，世界をリードする独創的な研究を続けられることを願う。